

左の文章は、島岡光一編著『野麦峠に立つ経済学』（春風社五月八日刊）の原稿の一部である。指数の都合で割愛した部分だが、出版した後、さまざまな批評をいただく中で、割愛したこの部分がかえって重要であることが意識されている。そこでこの際、ネットで公表することとする。

二〇〇〇三年八月二三日

島岡 光一

考える葦を考える

「草莽崛起」

土佐（高知）の坂本龍馬（一八三五年—一八六七年）も脱藩して驚くべき健脚をもって、新しい日本像を求めて、全国を駆けめぐりました。江戸城明け渡しの際に、薩摩の西郷隆盛と江戸の勝海舟が通訳を介して、談判した形跡がありません。これは不思議なことですが、かれらは普遍的なOSをもっていたに違いありません。私塾、藩校、寺子屋で読み書き算盤の根が深く深く張り巡らされたデファクト・スタンダードのOSが、日本の全国に奥深く根を張って実在していたと考えなくてはなりません。「学習指導要領」のように、そのOSは国家独占も私的独占もされていませんから、バグも制度疲労もありません。なにより証拠に、この優れた柔軟なOSがあつたればこそ、文明開化以降怒濤のように流入した外国のソフト（制度・道具）を走らせることができたのですから。

貝原益軒の『養生訓』^注に慣れ親しんでいた日本に、イギリスの交易ルート経由のコレラが入ってきたときは、内務省が強権的に、石灰酸を撒いたり、患者を隔離したり、西洋医学によって、コレラと対抗したのですが、庶民には、西洋人がコレラ毒を撒いたり、西洋人が患者の生き肝を食ったり、生き血を絵の具に使うなどと受け止められ、「コレラ一揆」が各地に頻発したことは確かです。コレラに対して、庶民は農作物につく虫を籠に入れて送り川や海に流す「虫送り」によって、患者にとりついた悪い虫を送り捨てるという手法をとったのですが、これは無力だったことはいまでもありません。文明開化には、こうした矛盾と軋轢を抱えながら、強権的な部分もあつたし、また、西洋文明を一面的に受け入れたことも事実ですが、基本的には、日本の庶民は、その優れた受容メカニズムを作動させて、消化していったのです。

一八七〇年代の学制は、この宏大な屈伸性のあるOSの上に、乗っかって初めて正当性を持ちえたのでしよう。しかし、すぐさま「富国強兵」のための究極の基盤としての操作的な統治制度に転化してしまいました。おそらく、明治の元勳たちの思慮は深かったのだと思います。公的医療制度から漢方・民間治療を放逐して、西洋医学の支配を確立したとと並んで、「富国強兵」「エコノミック・アニマル」のために、もつとも効率的な制度だ

注一

人それぞれの身分・老若・性別の本分を守って節制とバランスによって病気を遠ざける法

ったと思います。

しかし、「富国強兵」や「エコノミック・アニマル」の時代は終わりました。とすれば、日本の産業主義を支えた「学校」「病院」という制度に先行して存在し、かつそれらの根底を支えたあの読み書き算盤（リテラシー）の現代バージョンのOSをプログラムして、その上で、新しいソフトを走らせる時期にきているのではないかと思います。

読み書き算盤は江戸時代からの伝統的な日本のOSでした。寺子屋とか塾でインストールされていました。吉田松陰の「草莽崛起」（註）は、幕末在野の志士や百姓一揆への呼びかけですが、かれが獄中からの手紙の中、つぎのようにのべています。「草莽崛起、豈に他人の力を仮らんや。恐れながら天朝も幕府、我が藩もいらぬ。ただ六尺の微軀が入用」と。ここに、かれが期待したのは普遍的なOSをインストールされたすべての在野の人々でした。

しかし、「富国強兵」や「エコノミック・アニマル」の時代は終わりました。とすれば、「学校」「病院」という制度に先行して存在し、かつそれらの根底を支えたあの読み書き算盤（リテラシー）の現代バージョンのOSをプログラムして、その上で、新しいソフトを走らせる時期にきているのではないかと思います。

それは、すでに「草莽」の中に「崛起」していません。吉田松陰的な女性や男性、坂本龍馬的な女性や男性が「崛起」していません。吉田松陰的な女性や男性、坂本龍馬的な女性や男性が

そこで、そもそもこの「草莽」という根基層部分に、しばらく思いを巡らせてみましょう。

「考える輩」の文脈

パスカルは『パンセ』のあの有名な箇所つまり「考える輩」の該当部分でいっています。計算機は思考のよつなことをするが、意思は持たない(五の三四〇)とか、蛙がある種の魚の目を繰りぬくことは意思的にみえるが、いつも同じことを蛙がし魚もされているのであって、逆のこと、つまりある種の魚が蛙の目をくりぬくというよつなことなどはしない(五の三四一)とか、もし本能がやることを意識がやることができれば、どんな動物でも言葉をしゃべる(五の三四二)とか、例えば、「おうむは、まだ嘴がきれいなのに、それを拭

注一 吉田松陰（一八三〇—一八五九）長州（現山口県）の生まれ。藩士でありながら、藩の許可を得ずに各地に遊学。二七歳の時に萩で、「松下村塾」という私塾を開き、高杉晋作、伊藤博文、山県有朋などを輩出しました。松陰は安政の大獄で捕らえられ獄中で「草莽崛起」論に到達し、この言葉は幕末の志士の間で流行語となりました。翌一八五九年二九歳で、刑死しました。「草莽崛起」の「草莽」とは草の生い茂ったところの意味で、雑草の密集を想像してください。「崛起」とは根元から立て、という意味です。草莽崛起とはよく時代精神を表現したものと思えてきます。

う(五の三四三)と、つまり、おつむは本能としてそれを燥返す。人間の場合、思考が本能なのだ、それが偉大な点なのだ。こう論じた後で、「人間は一本の葦にすぎない、自然の中でもいちばん弱いものだ。だが、それは考える葦である。」(五の三四七の第一行)という有名な一文が入ります。俗説では、ここで葦のたとえが出されるのは弱いことの直喩だからだとされます。例えば、東京書籍の『改訂現代社会』(一九八四年検定、高校社会では上記の最後の一文を引いた後で、「自然の力をはるかに人間をこえているが、それでもなお人間が自然にまさるのは、考えるという一点においてである、という意味である。彼は、考えるところに、人間の偉大さを認めているのである。」(二二頁と説明しています。葦については、裏を返せば、人間は葦のように弱い、と解釈されているかようですが、これは相当吟味を要します。

有識者はどう考えているでしょうか

元来、葦はいたるところの水湿地に群生するイネ科の多年生草で、地下に長く根をはった根茎を縦横に出し、北海道から沖縄に至る全国どこでも、また世界の湿地にくまなく分布しています。その芽は竹の子のように食用に供せられ、茎は船を編み、よしずを編むために用いられます。極めてありふれた、また生命力ある植物ですから、弱さを葦で代表させるのには疑問を表明している者もいます。

我が国でパスカルに関する最も先駆的な研究者であった三木清は、パスカルにおける人間の分析を、分析していいいます。パスカルは人間の生を運動として見、不均衡として見ています。その動性の肯定的な契機を「意識」に求め、意識とはすなわち自己意識＝自覚的意識であり、それは様々な意識の形態のうち思惟において発揮されます。ここにおいて三木はあの「考える葦」のくだりを引用し、またあわせて、「人間は考えるために造られた」(二の一四六)も引用します。パスカルにあつては、と三木はいいいます、この自己意識＝自覚的意識＝思惟こそは、「人間の存在の par excellence」(格別優れた、の意—まあか)なる動性」であり、また「人間の品位であり、光栄である」とまで高調されます。(『パスカルにおける人間の研究』岩波文庫一九二六年五月初刊、「第一人間の分析」を参照)

三木はなぜここに「葦」が登場するのかについてはなんの関心も示しません。しかし、人間は存在論的必然性として思惟すること葦のこと、というのですから、「葦」そのものの存在論的必然性とはいかなるものなのか、が問われなければならないでしょう。

この点に関わつて、田中重弘さんはいいます。パンセが「弱い」という形容詞で用いたのは、フランス語の faible(英語で feeble)であつて、その語源がラテン語の febilis(英語の lamentableに通じ、心に痛みを感じるさま)なので、これがニュアンスとして faible にめられている、といっています。つまり、faible は「無用の、無力な、弱い、無価値の」などの

意味であり、パスカルの葦のイメージは「徒こたへに生い繁る」であろう、そして徒勞の習性は人間なら思考だろう、と解釈しています(『シエークスピアは欺しの天才』文芸春秋一九八

五年九月九〇―九一頁参照。

だが、ここで一つの疑問に行き当たります。「葦」は徒らなる習性の比喩として見た瞬間に、パスカルの目の位置が問われます。上から俯瞰的に見ればそれは侮蔑的で、嘲笑的なニュアンスをもち、下に並びいて、わが身を顧みれば、それは不敵でシニカルなニュアンスをもつことになるでしょう。いったいどちらなのでしょう。三木の説とあわせると、自覚的思惟主体としての「葦」ならば、後者のニュアンスにおいて理解してもよさそうです。

例えば、荒俣宏さんは『イソップ物語』の一見弱々しい葦が実は嵐に最もよく耐えるという寓話から、「このイメージはパスカルの名言□人間は考える葦である□につながっているのかもしれない。」(『大百科事典』平凡社一九八五年六月「ヨシ」の項とのべています。いずれにしても、葦は「弱い」ものの寓意として見るのは安易すぎることは確からしいのです。

聖書の記述はどいつか

先人の考証によれば、このパスカルの「人間＝葦」説は、旧約聖書イザヤ書と新約聖書マタイ伝から由来しているそうです。そこで少々調べて見ましょう。イザヤ書第四〇章では、

「人はみな草だ。

その麗しさは、すべて野の花のようだ。

エホバの息がその上を吹けば、

草は枯れ、花はしほむ。

たしかに人は草だ。

草は枯れ、花はしほむ。

しかし、われわれの神の言葉は

とこしえに変わることはない」

として、人の世の無常と神の言葉の不変性を対比するために、人を草になぞらえます。そのうえで、第四二章で、前章に引き続き「海沿いの人々」すなわち異邦人＝異教徒(Gentiles)に呼びかけています。

「わたし(エホバ―しまおか)の支持するわがしもべ、

わたしの喜ぶわが選び人を見よ。

わたしはわが霊を彼に与えた。

彼はもるもるの国びとに道をしめす。

彼は叫ぶこともなく、声をあげることなく

その声をちまたに聞かせず、

また傷ついた葦(a bruised reed)を折ることもなく、

ほのべらい灯心を消すことなく、

眞実をもつて道をしめす。
彼は衰えず、落胆せず、
ついに道を地に確立する。

海沿いの国々はその教えを待ち望む。「(傍点しまおか)と。」

この訳は日本聖書協会一九五五年改訳のもので、一般に英語の辞書によれば、broken road は支えようとしてもそれに堪えられないほど脆く弱い物または人の意、とされているからです。つまり、救いようもないほど「弱い」のは「一本」と「傷」ついたところ、おおよび、原野の暗い夜道を歩くのに灯は命の灯に等しかったことなど、古代人の経験がここに息づいています。それにしても、この一文は極めて難解です。次のような理解の試みはどうでしょうか。ここに異教徒が、その支配者の重圧に喘いでいて、傷つき希望の灯が消えかかろうとしています。そこでエホバはいいます。選民に不可思議な靈力を与えてやった。われわれはことをあえて荒立てて、大騒ぎすることによって、お前たちに迷惑をかけるようなことはしない。また道を造成してやると言ったからといって、お前たちのような地に生い茂げる葦がなぎ倒されなかつたか、いまにも消えそうになっている希望の灯も吹き消されはしないか、という心配もあるだろう。しかし、この選民は、たとえ傷ついた葦一本たりといえども折ることなく、微かに残る灯を吹き消したりもせず、密かに道を地に築くことのできる、そついう靈力を、かれらに授けたのである、と。

全体に、このイザヤ書は予言の書の一つで、イザヤが見た幻として蓄かされているが、エホバの支配下にある異端^{II}反逆との激しい闘争・弾圧の痕跡を露わにしめして、エホバによる阿責なき復讐の叫びに満ちあふれています。反面、異端よりも異邦人・異教徒にはエホバは好意的です。これらが対照的に出てくるのが第九章です。すなわち異邦人のガリラヤは光栄を与えられます。「暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照つた。云々」。他方、おごり高ぶつたイスラエルには残虐な弾圧をほしいままにします。「エホバはイスラエルから頭と尾と、シユロの枝と葦とを一日のうちに断切られる。」(「」でも葦が出てくることに注意)から始まって延々破滅への地獄模様を描きます。この第四章の引用も「海沿いの国々」すなわち異邦人(Gentiles)に呼びかけたもので、エホバが未だ征服していない者への宣撫工作としての意義をもつもの、つまり、恫喝を含んだある種の媚のよふなものが感じられます。つまり、エホバが「選び人」を派遣して、従わなければ容赦なく刈取るが、「傷ついた」ものは少なくとも一本といえども刈取らないで、道を敷設しよう、と。あの「万軍の主」復讐と嫉妬の神工ホバでさえ、手を焼いているのがこの「海沿いの国々」なのです。ちなみに、パスカル自

身によるこのイザヤ書第四〇〜四二章の解釈は、キリスト教からの影響が強すぎて、必ずしも原義に沿ったものとはいえないので参考になりません(『パンセ』一一の七一三参照)。

このくだりは新約聖書のマタイ伝第二章に引用されています。パリサイ人と矛盾を激化させつつあったイエスは、安息日にかんしても、対立しました。そこで、いよいよパリサイ人はイエスを殺そうと図ったので、かれはそこを逃れ、かれらから身を隠しつつ、自分がかここにいることを人に他言してはならないと箝口令(かんごう)をしいて、公衆の面前にでなくとも正義の道を示すことができる、ほら、聖書(ここでは旧約のこと)でもこのように予言しているではないかと、保証する件です。ここでは、このエホバに選ばれた人とは、イエスかれ自身であるかのように暗示されています。しかし、ここでは、「道」がソフィストケイトされて「正義」となっています。

イエスは地に生えるいばらのようなパリサイ人に絶えずなやまされますが、この両者は双方不幸な誤解(双方は教義においてはむしろ非常によく似ている)にもとづいてあい争っているのです、新約聖書のようにパリサイ人を悪霊と同一に見るのは歴史的に公平とはいえませんが。

イエスはエホバのように、一方では残虐な弾圧の雷鳴を轟かせつつ、他方では宣撫するというようなやり方はとらず、パリサイ人がかれを殺そうとすれば、密かに逃れ、かれらも否定できないイザヤの予言を持ちだし(それでいて「選び人」をそれとなく自分に見立てさせ)、その直後に、だまって悪霊にとりつかれた聾者の盲人の目と耳とを癒してやるという愛の奇跡を演じます。

ここでいう悪霊とはパリサイ人にほかならず、それを患者から取除くことによって、正義が、すなわち「道」が見え、聞こえるようにしたのです。エホバは「傷ついた葦」を一本たりとも折ることなく、単に言つにとどまったのですが、イエスはむしろそれを癒してやっています。同じエホバを信ずるパリサイ人は自分を殺そうとしていることと対比させて、自己の道義的優位性を暗に示しつつ、「道」すなわち正義と愛を地に確立したことになるわけです。鮮かなイエス派の本領発揮でした。

旧約聖書の世界では、「葦」そのものは、エホバが呵責なく制圧すべき反逆者と対照的な、征服されざる民草でしたが、イエスの下では、同じ唯一神エホバをいたたくパリサイ人よりイエスの周囲に群がってくる民草でした。たしかにイエスの生きた時代と世界では唯一神エホバを頂点とする信仰がほぼ全面的に優位を保っていたなかで、それを現実世界にいかにも適合的な形にもっていくか、という点で、普遍性が問われていたわけで、パリサイ人のように特定の強い人々の自力本願でなく、他力本願つまり神の愛をどこまでも信じれば救われると一般の民草の救済を説いたイエスの方が世俗な普遍性がありました。

すでにエホバが支配している地であっても、イエスの行く手は常に民衆が群がり、その「道」はソフィストケイトされて「正義」その中に見え隠れしてパリサイ人は攻撃をしかけて来ます。あたかも鬱蒼と生い茂げる葦に潜むいばらのように。荒蕪地を旅する旅人

の難渋がイメージとしてダブリます。そこで、イエスが十字架にかけられるとき、頭にいはらの冠が、手に葦の杖がもたされて嘲笑されるクライマックスへと場面が展開します。そして彼は復活まではいったんは敗北して、死ぬこととなります。

『古事記』の記述はどうでしょうか。

「葦」に関する古代人のイメージを探るのに『古事記』ほど適当なものはないでしょう。むろんパスカルが『古事記』を読んでいた、ということをも証明するものは何もありません（これは冗談。冗談が通じない人の為に念のため）。古代に階級・国家・一宗教の確立過程（それは征服戦争と交易と融和の全過程を一つの神話的具象において眺める時、葦に関するイメージがかなりの程度において、東西共通するものがあるのではないかと思うからです。日本の神話の『古事記』や『日本書紀』のなかに「葦原の中ツ国」という表現で、現世すなわちこの国を表現しています。

「葦原中国」の解釈について、益田勝實さんは次のように言っています。

「高天の原―中ツ国―黄泉国（根の国）という、古代人の天上・地上・地下の三段階構想の神誘的な世累観が、この□中ツ国□に現れている、とする西郷信綱の宇宙軸の指摘は、日本神話の潜在的部分の構造的・記号的把握として、斬新で至当な説と高く評価された」として、この「西郷説出現以来、若い研究者のみならず、学会の長老層もおおむねこの説を採っている」（『古事記』岩波書店一九八四年一月一八八頁と）。

もっとも、益田氏自身は、この宇宙軸を上中下の縦軸だけでは理解せず、黄泉国を、「中ツ国」と同じ平面の周辺地域にあると考えた方が、古代人の世界観に近いのではないかという考えを提唱していますが（一八九―一九二頁参照）、ぼくも同意見です。

それはともあれ、専門家が西郷氏の説が定説になっている、というのだから、一介の門外漢のぼくは無駄な抵抗は止めて、彼の見方（『古事記の世界』岩波新書 一九六七年九月）をベースに、葦と『古事記』との関係を見ていきましょう。

そもそも、『古事記』上巻の冒頭の天地創造のところでは、「国稚わかくして浮うきし脂あぶらの如くして、くらげなすただよへる時、葦あしかび牙の如く萌えあがる物に因よりて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神うまつしあしかびひこぢののみかみ」とあります。はじめて現れる具象的な神の名が、「うましあしがびひこぢの神」でした。「うまひ」、「うまし」とは美しい、「かび」とは芽という意味です。

『日本書紀』では、「国常立尊くにつくりのみこと」という神となっています。いずれにせよ、益田氏が言っている（前掲書一八一頁参照）ように、春のはじまりに芽が萌え出る物の神格化であると同時に、国が永遠に立ったことを宣言しているのです。

「葦原の中つ国」が最初に登場するのは、イザナキの黄泉よみの国訪問の説話において、イザナミの命が火の神を産んで、「ホト」（女陰）を焼いてしまいました。それがもとで死んで、黄泉の国へ隠れました。夫イザナキの命は彼女を慕って黄泉の国へ訪問します。それはそれは汚く醜いところでした。イザナミの命は「よくもあたしに恥をかかせたわね」とばかり、イザナキの命を殺そうとします。彼は必死に逃げ、黄泉の国の境界に来たとき、桃の実を取って投げつけて、やっと「葦原の中つ国」に到達できました。そこで、イザナキの命は桃の実に向かってこういいます。

「葦原中国にあらゆるつつしき青人草の、苦しき源に落ちて患いなやむ時、助くべし」と。ここで「つつしき」とは生きとし生きるものの住む現実の国のことです。

追って来たイザナミの命は、「葦原中国」に逃れた元夫に向かって、「こんなことをしたんだから、あたしや、『汝なの国の人草』を一日に千人、絞り首にしてやるからな」とわめきます。イザナキの命は「おお、上等だ、やって見るつてんだ。おれは一日に千五百人を産ませてやるからね」わめき返えます。なんとも神様の世界でさえ、男女の別れとはこんなものだったのかと、改めて教えられます。考えて見れば、ぼくら「青人草」こそ夫婦喧嘩のトバッチリを受けていい迷惑です。ここで、現実の人を草にたとえ、その草とは「葦」原に住んでいるのですから、葦の謂であること明瞭です。つまり、現実の人は葦にたとえられています。それも、穢きたまい死者の住む黄泉の国と隣接している国でした。

「葦原中国」の位置については、すでに指摘しましたように、西郷さんの研究で、大体つきているのでここでは問題にしないことにしますが、パスカルとの関わりで、いうならば、三木清さんのいうように、パスカルは人間を中間的存在者として位置付けています。デカルトも人間をmediumと規定しているように（三木著前掲書一五頁参照）。その意味は、極大自然と極小自然との間の存在論的中間だ、ということです。人間は、極大自然に対しては、極小であり、逆に極小自然に対しては極大です。この状態をパスカルは優越なる魂と呼んでいます。かれは、この中間的存在から発して神に向かうことを哲学の使命と考えるのです。むしろ、『古事記』における「中つ国」は、どこまでも「高天たかまが原」から見た中間性であるとしても、人間のある種の中間的存在として見ている点で興味深いものがあります。

さて、これまでは「中つ国」の創造とその位置的な面を見てきましたが、この「葦原中国」は、どんなところだったのでしょうか。天照大神あまてりしほのおみかみの岩屋戸に隠れさせた原因を作って高

天原から追放になった「すさの男」の神は、出雲の国にやってきて、結婚をし子孫を産み

ました。その中に大國主の神がいます。黄泉の国へ二度も行って因幡の白兔の説話

で有名な受難の神です。この神は五つの名前をもっています。大國主の他、大穴牟遲、

葦原色許男、八千矛、宇都志國玉の五つです。最初の名は、読んで字のごとしでしょう。

次は面倒な考証は差し控えますが、「大きな土地をもつ」という意味だといえます。三番目は、「シコヲ」は「醜男」とも書かれるように珍しいことに蔑称にほかなりません。四番目の名は武力を蓄えた神、最後の名は、「ウツシ」すなわち現実の国(葦原中国)の王の意味でしょう。要するに大國主の神は、「高天原」を追放された原罪を背負った「すさの男の神」の子孫で、受難の旅をしながら、兎や母や女たちに助けられつつ「葦原中国」の実効支配権を握るに至った現実の王なのです。

とすれば、天照大神とすれば、その覇権の奪回を画策せざるをえません。しかしそれは難問でした。「シコヲ」と蔑もつと、彼は大土地所有者であり、強大な武力の保持者だからです。天照大神はいいいます。

『豊葦原の千秋長五百の国は、いたくさやぎてありなり』と。

『日本書紀』では、「多に螢火の光く神、及び繩聲す邪しき神あり。復草木ことごとく能

く言語有(国)卷第二「神代下」(となっています。これは書紀本書の記述ですが、「一書」にもまた似たような記述が見られます。「葦原中国」というのは、「高天原」から見て、葦の繁った未開野蛮な地であって、その様は葦が不気味にザワザワとも言い乱れ、夜は火がチヨロチヨロ見え、昼は蠅がぶんぶん群れ飛ぶごとくに荒れている荒涼たる土地でした。ここで、西郷さんはいいます。それは「不吉な反乱」を諷するものであり、「デーモ

ンどもの蟠踞する混沌たる未開の世界であり、それ故にことむけられるべき地であったのだ(前掲書二二頁)と。ここで古代ギリシャのオウディプスの『転身物語』(岩波文庫訳下巻所収)の中にある有名な話が思いだされます。ロバの耳を持つミダス王の秘密を知った髪結師が、穴を掘って「王様の耳はロバの耳」と囁き、あとを埋めて安心していたところ、穴の上に生えた葦が、風そよぐ度に王様の秘密を口外しました。それはともあれ、ここで世界にも稀な「国譲り」説話が続きます。『日本書紀』では、この物語は多分に武力的解決に訴える傾向がありますが、『古事記』では平和的交渉による傾向があります。とはい

え、天照大神は大国主の神のところへ取りかえ引きかえいろいろな神を送りこんでは、三回も失敗します。第一の使者は、天の橋立から見下し眺めやっただけで、何もせずに逃げかえってきました。第二の使者は、こつちから大国主の神に媚びを売って三年も復命しませんでした。第三の使者は、大国主の神の娘と結婚して八年も復命しなかつたあげく、天照大神に殺害されました。この間スパイとしてキジが派遣されますが、その使者に殺されています。第四の使者は、大国主の神ののらりくらりの態度に辛抱強く応対して、ついに大国主の神側の軍の大将ともいっべき息子と対戦します。使者は息子(実は彼の手)を、若輩を取るが如、掴みひしぎで投げ離はなったので、彼は降参しました。輩が払われたのです。

大国主の神自身も武装解除された形で国を譲ることを約束して、「葦原中国」は平定されてしまいました。『日本書紀』ではこれを「葦原の中つ国の邪しき鬼おにを払い平たいけしむ」と表現しています。以上で、『古事記』の輩は、すこぶる頑強で、デモニーシユな雰囲気をもつて、征服者Ⅱ支配階級としての天照大神をいかに悩ませ、脅威を与え、反抗したかを、鮮かに読みとることができたでしょう。なにしろ、天照大神が決意してから一一年も経過し、一人の神、一羽のキジが死んでいるのに、大国主の神の側には、だれも死んでいないからです。この出来事は『古事記上巻』に収められてあり、聖書では旧約聖書にあたります。しかし、大急ぎで断わっておきましょう。『古事記』は決して「神の国」の地上での実現を目指したのではなく、現にある地上の国を、神の国」として権威づけたのです。

おわりに

日本語では輩のアシとは、邪し、悪し、という意味を連想させますので、その反対のヨシというようになった、とはどの辞典にも書いてあります。案外、古代の支配者の意識の中では、輩を言葉の真の意味で、邪し、悪しと感じていたのかも知れません。翻つてもともと、悪とは強いという意味をなします。悪友とは切つても切れない良い友達すなわち親友の謂です。悪女がそうであるように。西洋の事情、文献、歴史に疎いばかりには、輩にまつわる西洋的原義について、知るよしもありません。たしかに、新旧約聖書における説話は、『古事記』と比べると、おそろしく動物的、人間的、かつ商業的、それでいて禁欲的である。植物でも、果実や穀物など人間の食用に供せられる植物は頻繁に登場しますが、野生の植物の登場は極めて稀であるような印象を持ちます。だから、輩とかいばらが目立つともいえましよう。輩は繁茂する野生の植物の代表でしょう。それは、自然そのもの「です。『パンセ』の中の「人間の本性は、まったく自然そのものであり、『まったく動物そのもの』である」(二の九四)と「人間は、明らかに考えるために作られている。それが人間の尊厳のすべて、人間の価値のすべてである」(二の一四六)とを重ね合せると、自ずと「考える輩」の規定の真実の意味が見えてきます。輩とは「弱い」のでも、単に「徒らな」ので

もなく、それ自体は、荒蕪地を平ける人旅人をして、難行苦行を強いずにはおかず、その中に、凶悪なる敵を隠しもっている存在なのです。まさに、ここに葦の意味論を見るべきだろうと思います。人間の自然必然性としての「考える」様はそれに似ているということです。まことに「考える」人間は、無限定の環境のうち、不安定・不断の運動のうち、あり、アシともヨシともなりうる「考える葦」とは言いえて妙です。